

「番頭さん、こちらの旦那さんにお包みしてさしあげると言っているじゃないか、どうしてやらないんだ？」

侯執事は忽然となにごとかを悟ると急いで言った。

「わかりました、すぐにお包みいたします！」

長栓は夢をみているかのように小声で尋ねた。

「若旦那様、こちらの旦那様はたった一両でこの玉環を売ってくださるんですか？」

致庸は夢から醒めたかのように慌てて手を振った。

「いけません、ご主人、そんなことでできません」

「どうしていけないんです、今日はあなたにお売りするんですよ！」

陸大可が言っても、致庸はやはり手を振っている。

「ご好意はありますが、やはり受け取るわけにはいきません。ゆえもなく恵んでいただくわけには」

陸大可は髭をひねって笑った。

「ああ、わしがたった一両でこれをお売りするわけを知りたいのですな？ ではお教えしましょう、あなたが気に入ったのですよ。この品物の使い道を心得ておいでだ。今日この玉環をお売りすれば、いずれあなたのご縁談の手助けになるでしょうからな。さて、わしは全部お話ししましたぞ、もういいでしょう。ほかの人なら二十両でなければ決して売らんのですがな！」

これを聞いて致庸はすぐに笑いだした。

「そこまで仰るならもう言うべき台詞が見つかりません。今日はほんとうに幸運に恵まれました。」

た。しかしそれでもやはり頂くわけにはいかないのです」

「また異なことを仰る。わしも大概変わり者ですが、あなたはわしよりずっと変わっていらっしやる。たった一両でいいと申し上げておるのですぞ？ ほとんどただで差し上げるようなものだ。なのになぜいらぬと仰る？」

「率直に申し上げますと、わたしの実家も商売をやっております、商売人は公平を重んじねばなりません。この取引はわたしには有利ですがあなたには不利です。わたしは不公平な取引引きはできません」

陸大可はちよつと考えた後バツと破顔した。

「あなたは玉器のことなど何もおわかりでないと申し上げたらどうです？ 実はこの玉環は、わずかに銀子五錢（錢は重さの単位。一両＝十錢。）で仕入れたものなのです。一両もらえれば十分利益が出る計算だ！」

致庸は驚いて再び玉環をじっくりと改めた。

「ほんとうですか？」

「ほんとうかですと？ 南京から北京まで、安く仕入れていかに高く売るのが腕の見せ所ですぞ。商売人ともあるうものが、損などするものですか」

「そういうことなら買いましよう」

致庸はちよつと考えた後あつさり一両の銀子を出して会計を済ませた。侯執事がすぐに玉環を包んで渡し、双方別れの挨拶をした。致庸はいささか尻がこそばゆく、二歩踏み出した所で陸大可を振り返った。

「ご主人、すみませんがご尊名を教えてくださいただけますか？」  
陸大可は髭をひねって微笑んだ。

「なんですと、わしと親戚になりたいのですか？ その必要はありません。お帰りなさい」  
「では、お暇いたします！」

致庸と長栓は顔を見合せて笑うと、陸大可に向かつて軽く拱手した。陸大可は礼を返さず目を細めて二人が出ていくのを見守っていた。

黙って奥で外の一幕を見ていた玉菡の顔がカツと熱くなった。明珠が不思議そうに尋ねた。  
「お嬢様、旦那様はおかしくおなりになったんじゃないですよ？ さっきは二十両だって仰つていたのに！」

玉菡は明珠を見やると花窓を離れた。明珠がペロリと舌を出し何か言いかけたところで、陸大可が笑いながら戻って来た。玉菡は猫を抱いて座り顔色も変えずに尋ねた。

「お父様、たった一両であんない品を売ってしまうなんて、惜しくないんですの？」

「だれが惜しくないなどと言った？ 娘や、おまえのために父は家産を傾けたんじゃないか！」  
玉菡はわざとわからないふりをした。

「お父様、そんな聞こえのいいことを仰らないで。わたしには何の関わりもないでしょう！」  
老人は苛立ったふりをして脚を踏みならした。

「そうなのか？ だつたらだれかに玉環を取り返させねば！」

玉菡はポツと赤くなって逃げだそうとしたが、突然振り返った。

「お父様、もう一度申し上げますが、みんなお父様がなされたことよ。わたしとは関わりあ

りませんからね！」

陸大可は娘が恥ずかしくて走り去るのを見てニンマリした。

「まだ申し込みをしたわけでもないのにあんなに恥ずかしくおつて！ まだまだ子どもだな！ ……さて次はかれをうちの婿にできるかどうか見てみることだな」

明珠は玉菡と一緒に裏の花園に駆け込むとからかった。

「お嬢様、今日はどうしてそんなにご機嫌なんですか？」

玉菡はあわててまじめな顔を作った。

「わたしがご機嫌ですって？ わたしはいつだって機嫌がいいわよ！」

「フフ。今日はいつもと違いますよ。ねえ、お嬢様、旦那様がどうしてあの玉環を喬致庸に売ったのかわかりましたよ！」

「どうして？」

玉菡が素知らぬふりをして尋ねると明珠は笑った。

「いつかあの方がお嬢様をもらいにくる日のためでしょう？」

玉菡は恥ずかしくて明珠をぶつふりをする、明珠はくすくす笑ってかわしてしまう。主従ふたりはしばしそうしてじゃれあった。

人の往来が盛んな商店街で致庸は突然立ち止まった。

「わたしはばかだなあ！ この鴛鴦の玉環が一両なんてはずはないのに。遺愛館玉器のご当主はほんとうに変わったお方だ。なんであんなに熱心にわたしに売ろうとしたのだろう？」

長栓は絹織物屋に氣をとられ、上の空で言った。

「ひよっとしたら旦那様が気に入ったとか、お眼鏡にかなったとか、あの老人は頭がおかしくて損を承知で売らずにはいられなかったとか。商人が十人いれば九人までは変人だなんて言いますからね。若旦那様、損をしたのは向こうですよ、われわれになんの関係があるんです？こんなうまい話には乗らない手はありませんよ！ねえ、それより近頃どうして絹織物はこんなに高いんでしようねえ？」

致庸の頭は玉環のことで一杯で長栓に返事をしなかったが、二歩歩いた所でいささかがっかりした風に言った。

「しくじったなあ！世の中全て因果応報なのに。この環を得たツケがいつかきつと回ってくるぞ。まだそれが何かわからないけど」

長栓はなんとか絹織物屋から視線を引き戻すと笑った。

「若旦那様、大丈夫ですよ、八股文のおかげで頭がぼんやりしてるだけです。雪瑛お嬢様が香袋をくださった御礼に何か買おうと太原府をぶらついていて、思いがけない幸運に巡り会ったってことですよ。さあもう行きましよう、戻って試験の準備をすることの方が大事ですよ！

万一旦那様の手紙が本気だったらどうなさいます？」

致庸の顔が曇った。その時突然後方から包頭の四海通信局の旗を掲げた早馬が飛ぶように走ってきた。人馬共に汗びっしょりになっている。街の人々はわらわらと道を空け、致庸も驚いて眉をひそめ、遠ざかる配達夫を見送った。

「若旦那様、行きましよう。いまは包頭の四海通信局の配達夫のようですね。われわれとは何の関係もありませんよ！」

長栓はそう言ったが、致庸の表情がただならぬことに気づいた。致庸はしばらく黙り込んでいたがようやく言った。

「天下の事は天下のみなに関係がある。天下の人々は天下のことに関心を持つべきだ。なのにどうしてあの配達夫が喬家やうちの包頭復字号やこの喬致庸に関係がないってわかるんだ？」

長栓は虚をつかれ目を細めてじっと致庸を見つめた。

「若旦那様、だったらわれわれは一体今どこに行くべきなんですか？あの孫茂才を捜しに行くんですか？」

しかしすでに致庸の気持ちは変わっていた。

「いいや、戻るよ！」

そう言うのとスタスタと歩き出した。